学校と社会をつなぐ調査 最終調査直前イベント「いま、学校と社会をつなぐとは」（2021年9月18日）

これまでの10年トランジション調査の結果（復習）

溝上　慎一　　Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

http://smizok.net/
E-mail　mizokami@toin.ac.jp

ウエブサイト「溝上慎一の教育論」

http://smizok.net/education/

今日の話に出てくる用語や概念の詳細を知りたい方はお読みください

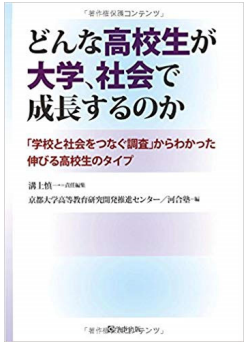
【略歴】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年同講師、2003年同准教授、2014年同教授を経て、2018年桐蔭学園へ移動。2019年同理事長、2020年より現在に至る。京都大学博士（教育学）

＊詳しくはスライドの最後にあるプロフィールをご覧ください

10年トランジション調査

2013年時 全国約400校、約45,000人の高２生が参加

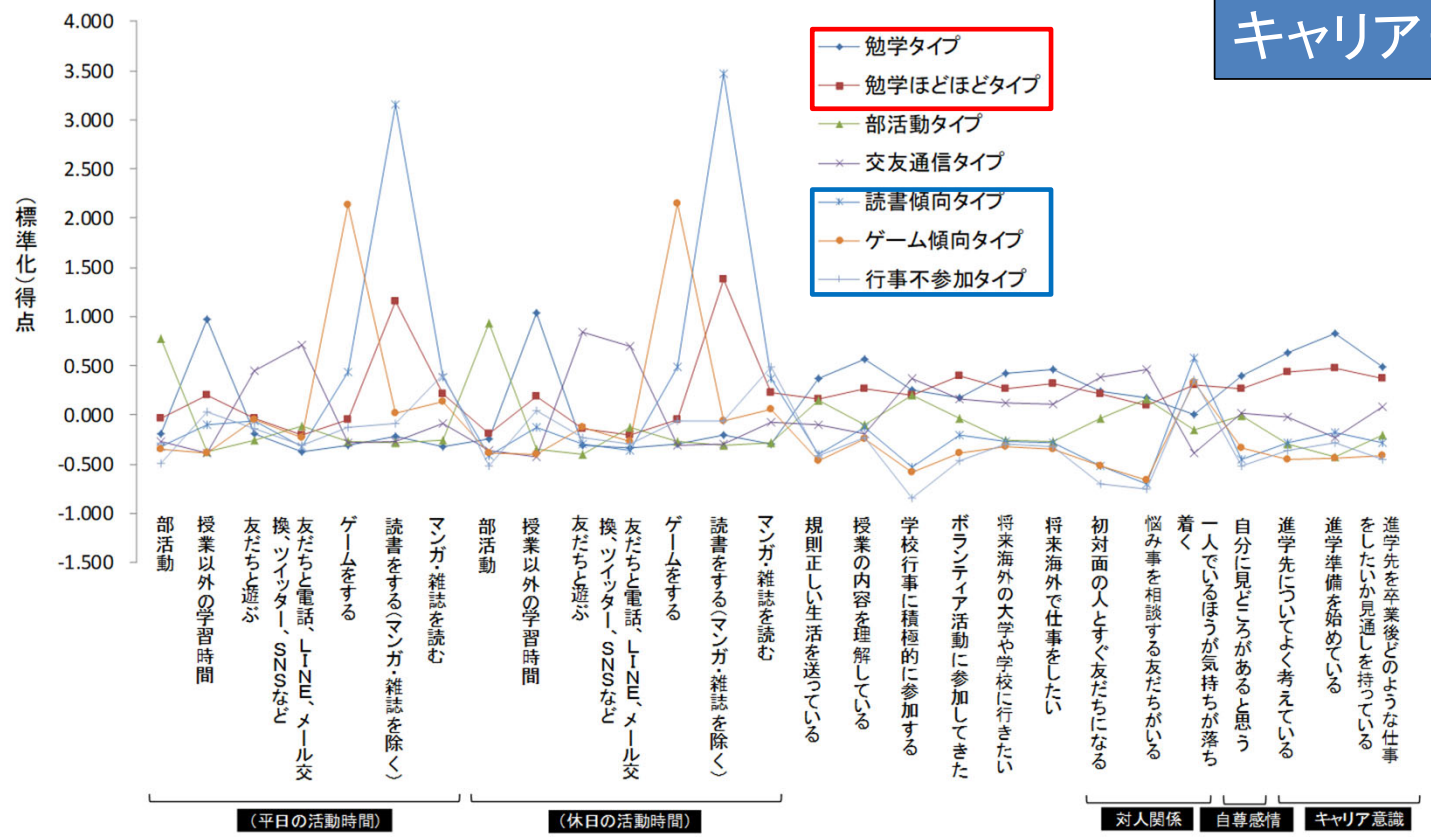
2014年7~9月	MEETING	全国8会場　分析結果報告＆シンポジウム　於：金沢会場・札幌会場・福岡会場・広島会場・大阪会場・名古屋会場・仙台会場・東京会場　資料等詳しくはこちら
2014年6月	PUBLICATION	学校と社会をつなぐ調査　第1回調査(2013年秋実施) 分析結果報告―1時点目（高校2年生） 報告書―　（報告書PDF）
2014年5月10日	MEETING	高等学校連携協力者向け第一次成果フィードバック　於：河合塾麹町校（東京都）
2014年3月13日	MEETING	京都大学・河合塾合同記者会見　於：航空会館（東京都）　（案内　会見スライドPDF）
2013年4月1日	OTHERS	プロジェクトの開始　*全国の教育委員会・高等学校へ案内　（趣意書PDF）
2013年3月18日	MEETING	京都大学・河合塾合同記者会見　於：霞山会館（東京都）　（案内　会見スライドPDF）



溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）(2015). どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ―　学事出版

溝上慎一監修　京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）　（2018年2月）
『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』　学事出版

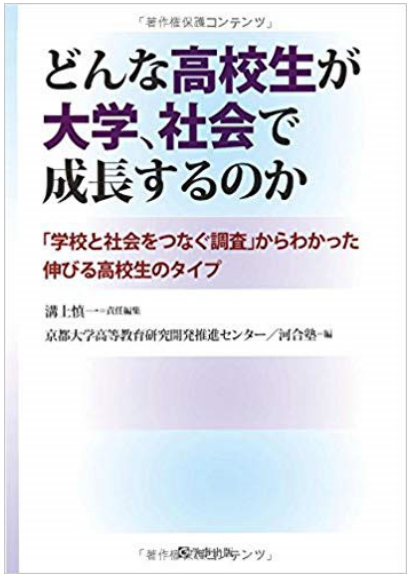
図　高校生の7タイプ



クラスタ分析（K-means法）

4

大学生と同じ知見が高校生でも認められる
キャリア＋学び＝成長

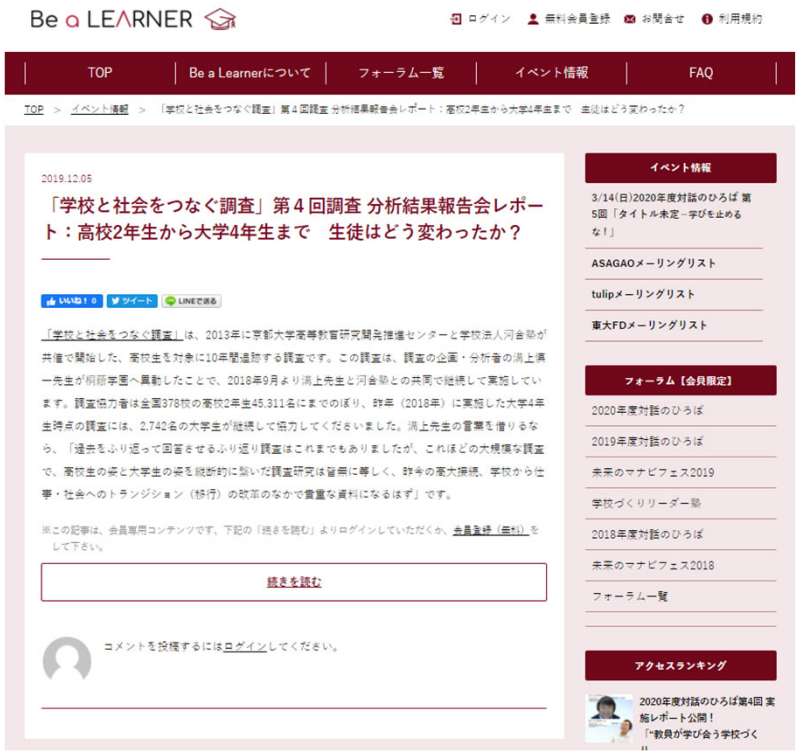


2014年9月26日報告スライド（東京会場）

10年トランジション調査

- 2013年時 約45,000人の高２生が参加
- 2018年時（大学４年生） 2,742名

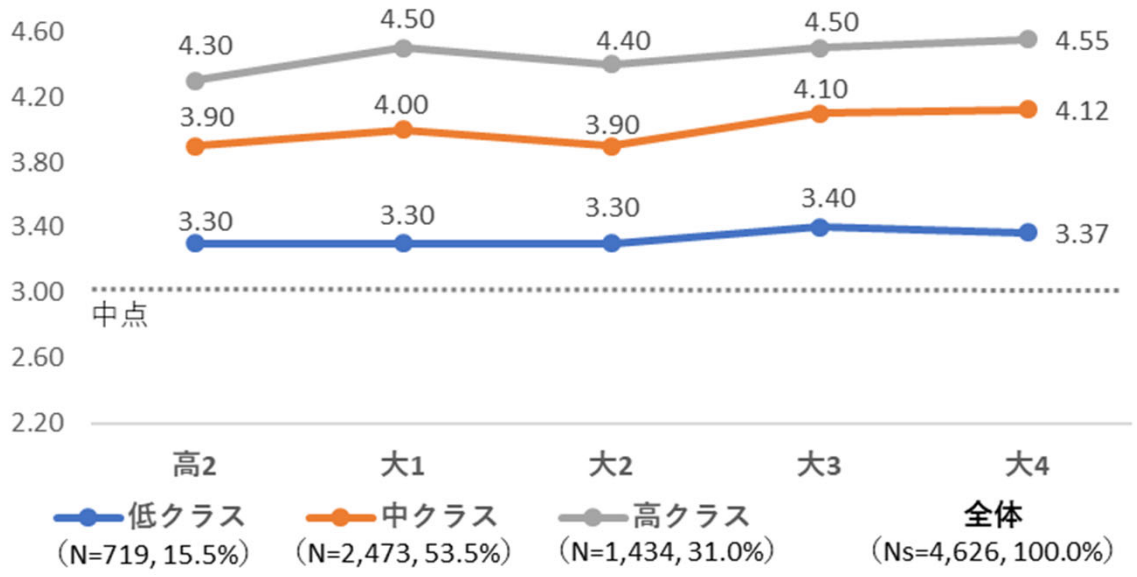
（男性996名、女性1,731名）が継続的に調査参加



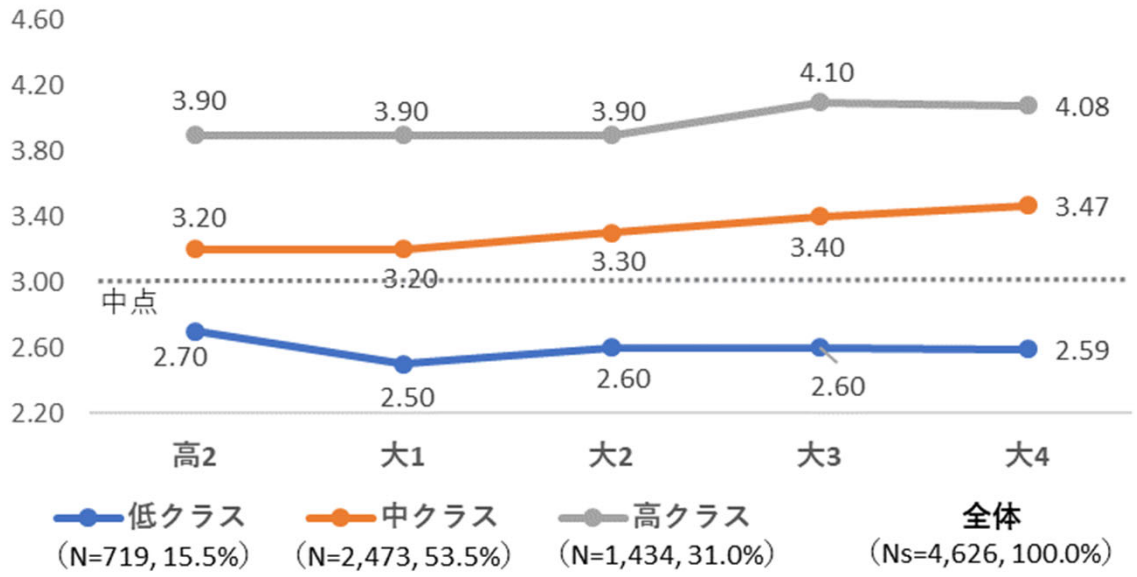
高校2年生から大学4年生まで生徒はどう変わったか？－『10年トランジション調査』中間報告（『Be a Learner－未来のマナビを考える－』サイト 要会員登録）

https://be-a-learner.com/5296/

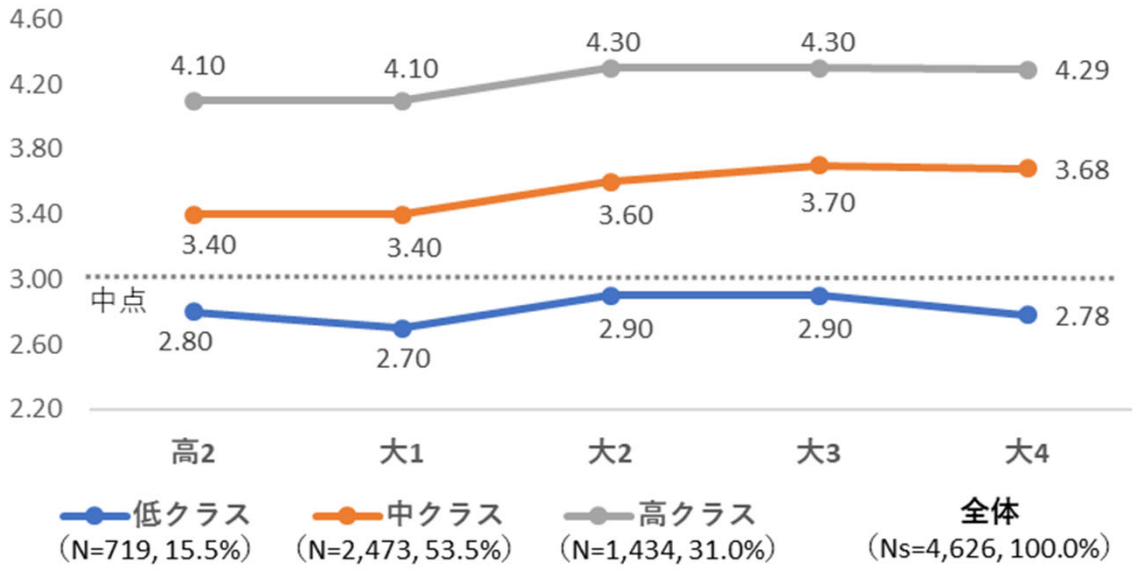
他者理解力


4.60
4.20
3.80
3.40
3.00
2.60
2.20
4.30
4.50
4.40
4.50
4.55
3.90
4.00
3.90
4.10
4.12
3.30
3.30
3.30
3.40
3.37
中点
高2
大1
大2
大3
大4
低クラス
（N=719, 15.5%）
中クラス
（N=2,473, 53.5%）
高クラス
（N=1,434, 31.0%）
全体
（Ns=4,626, 100.0%）

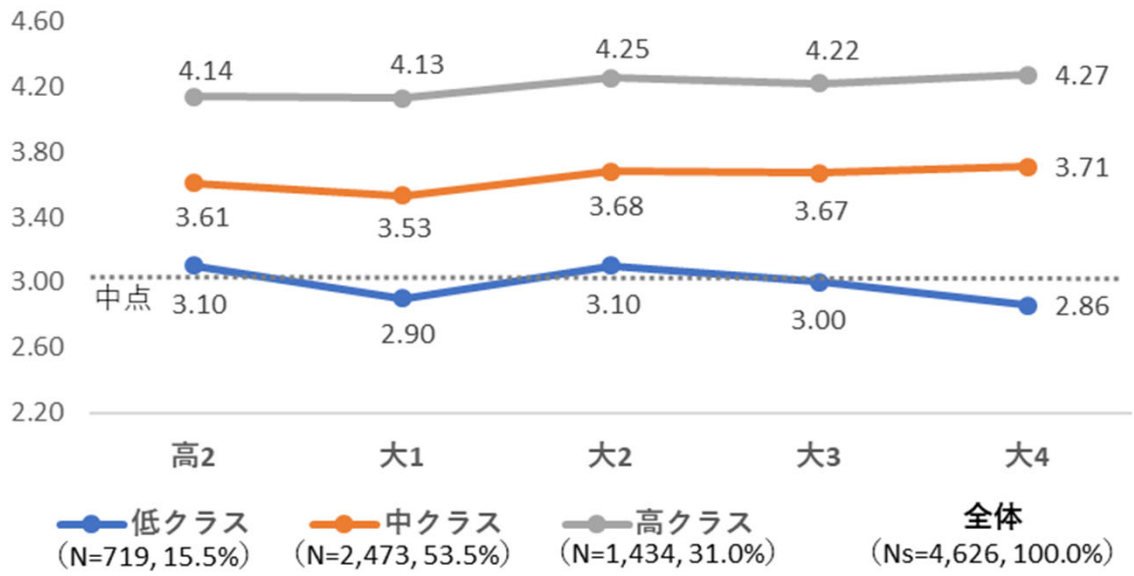
計画実行力


4.60
4.20
3.80
3.40
3.00
2.60
2.20
3.90
3.90
3.90
4.10
4.08
3.20
3.20
3.30
3.40
3.47
中点
2.70
2.50
2.60
2.60
2.59
高2
大1
大2
大3
大4
低クラス
（N=719, 15.5%）
中クラス
（N=2,473, 53.5%）
高クラス
（N=1,434, 31.0%）
全体
（Ns=4,626, 100.0%）

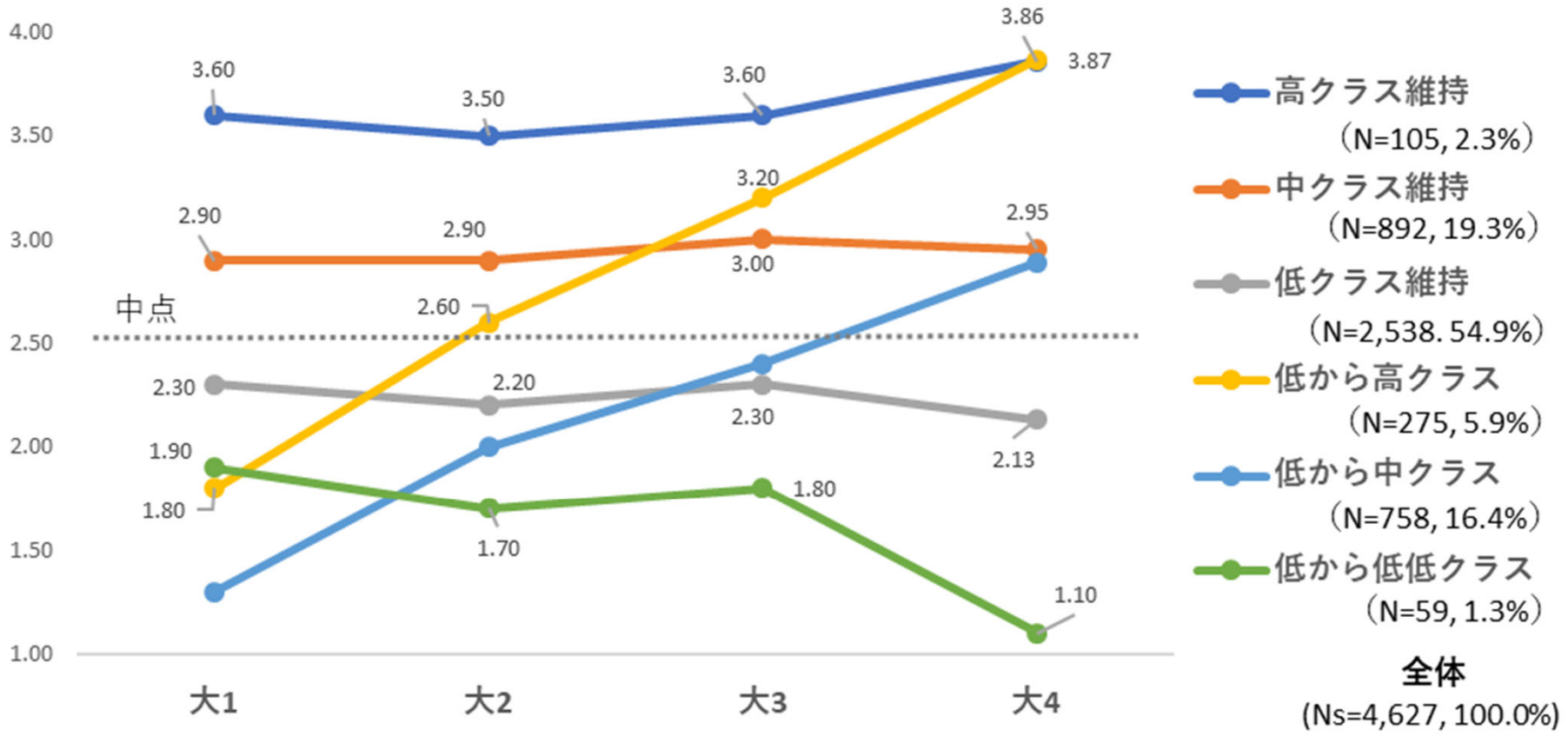
コミュニケーション・
リーダーシップ力



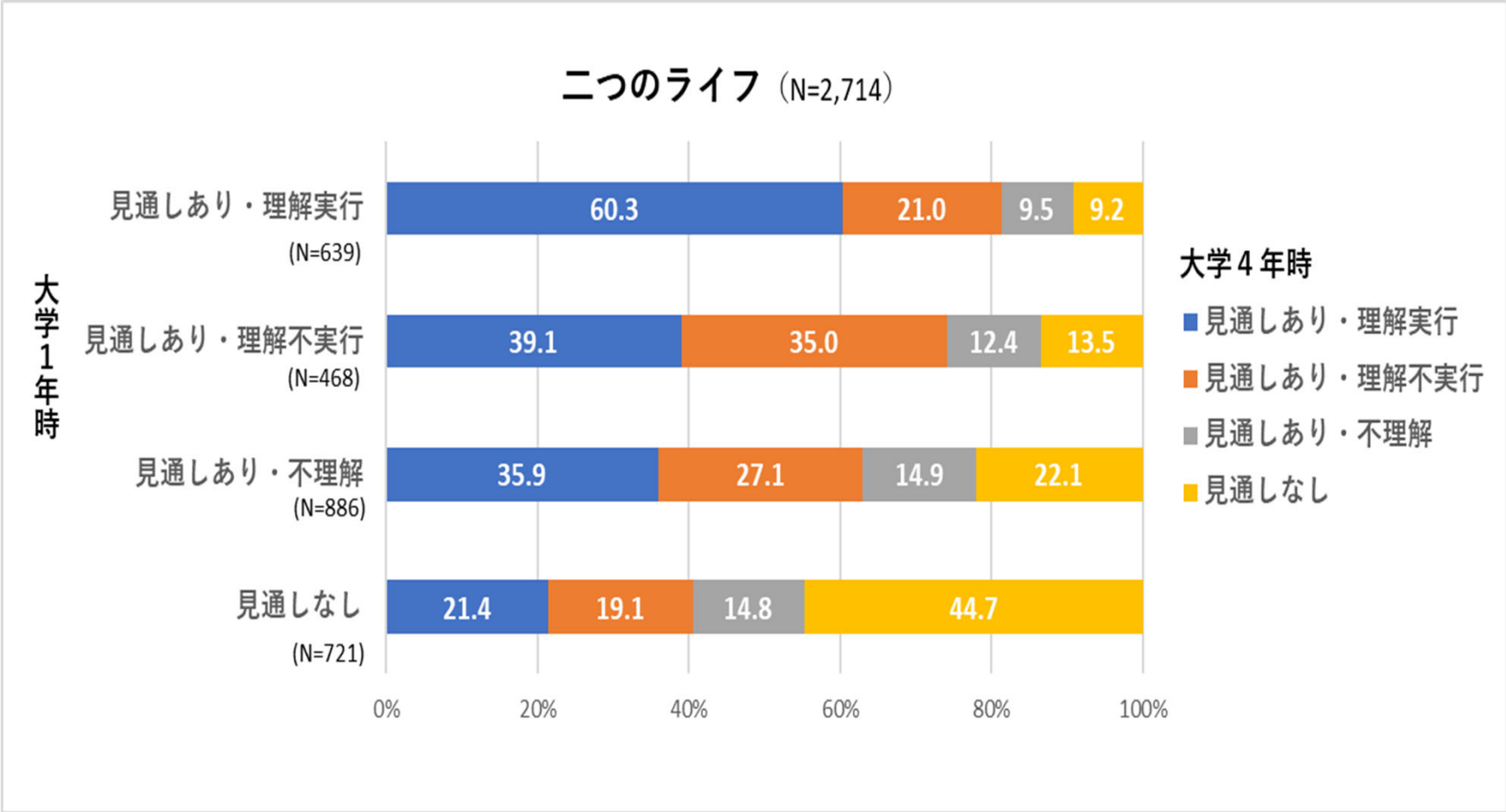
社会文化探究心



アクティブラーニング（外化）する態度や能力の変化



二つのライフ（将来の見通し＋理解実行）（キャリア意識）



（補完調査）全国大学生３・４年生調査

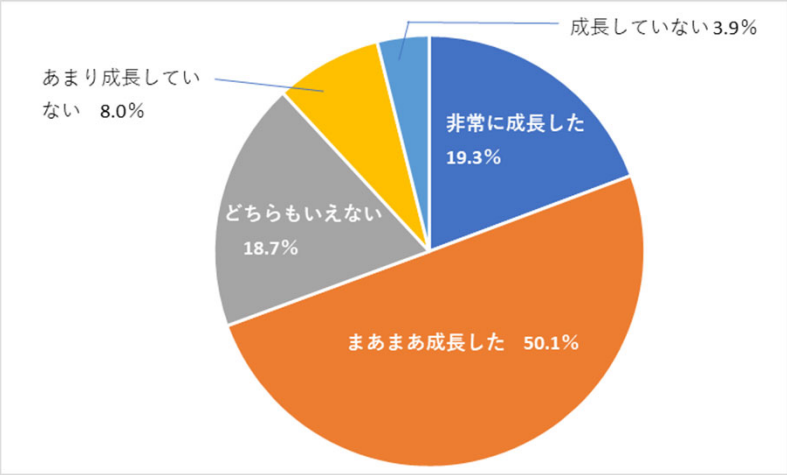
「発達」と「成長」を見分けることが重要！

①発達（psychological development）
幼少期からの積み上げ的な心理的発達

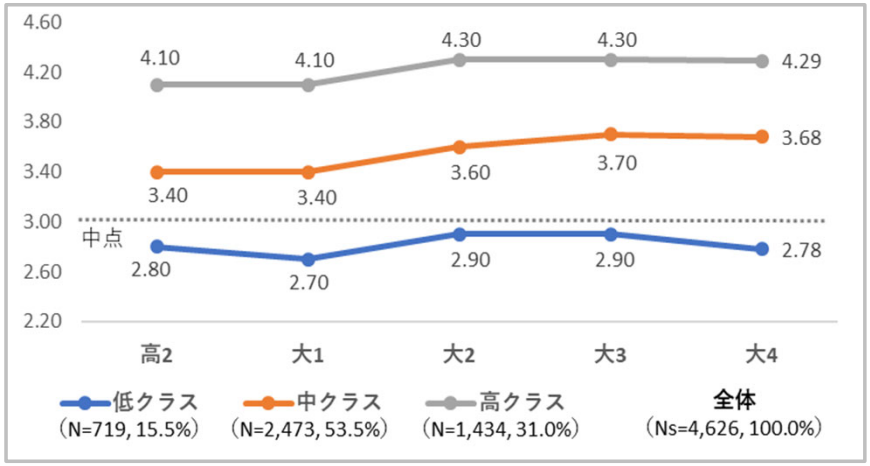
②成長（subjective development）
- 生じること
- 単純から複雑へ進歩すること
- あるテーマをつくりあげること
- 開くこと
- ~~より発展した状態へと移行すること~~（→①）

（Valsiner et al., 2003）

Q「あなたは大学生になって以降、全体的にどの程度成長したと感じますか。」



（N=2.062人）



→　統計的に、個人間の変化は認められないが、
個人内変化は認められる

TOIN GAKUEN

ご清聴有り難うございました

TOIN GAKUEN

http://smizok.net/

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年京都大学准教授、2014年教授を経て、2018年9月に学校法人桐蔭学園へ。2019年同理事長、2020年より現職。京都大学博士（教育学）

日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、“*Journal of Adolescence*”Editorial Board委員、文部科学省高等教育局スキームD（座長）、中央教育審議会初等中等教育局臨時委員、総合教育政策局リカレント教育審査委員、大学・高校の外部評価・指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年・発達心理学・教育実践研究（自己・アイデンティティ形成、自己の分権化、学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション、人生100年時代のキャリア形成など）。著書に『自己形成の心理学ー他者の森をかけ抜けて自己になる』（2008世界思想社、単著）、『現代青年期の心理学ー適応から自己形成の時代へー』（2010有斐閣選書、単著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』（2018東信堂、単著）、『学習とパーソナリティー「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね！」をどう見るかー』（2018東信堂、単著）、『高大接続の本質ー「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題ー』（2018学事出版、編著）など多数。

最近の著作紹介

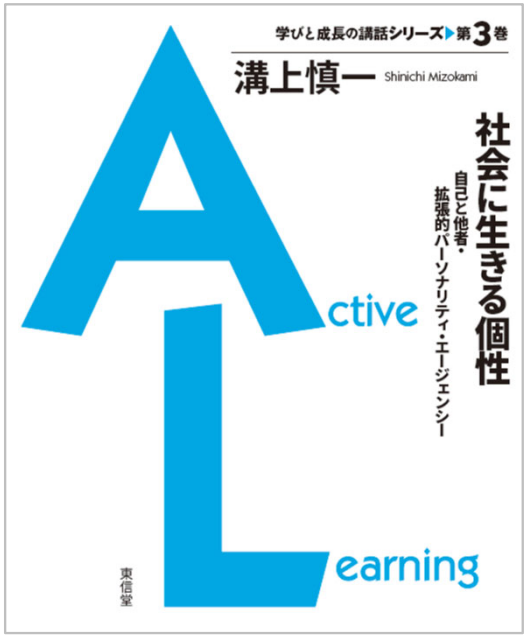
溝上慎一（2021）. 高校生の学びと成長に向けた「大学選び」
ー偏差値もうまく利用するー　東信堂

第１部　自身の「大学選び」の質を高める５つのポイント
- 第１章　Point1 将来の見通しを持つ
- 第２章　Point2「大学で何を学びたいか」からではなく、「将来どのような職業に就きたいか」から「学部選び」を行う
- 第３章　Point3 大学がアクティブラーニング型授業を積極的に推進しているかを調べる
- 第４章　Point4 偏差値をうまく利用する
- 第５章　Point5 三大都市圏以外の大学を選択肢に含める
- 第６章　（おまけ）中小企業はおもしろい！
  ――ここから職業、「大学選び」を考えてみる

第2部　高校生からの質問に答える

最近の著作紹介

溝上慎一（2020）.『社会に生きる個性―自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー―』（学びと成長の講話シリーズ３）　東信堂



第１章　自己と他者の観点から見る学びと成長

１．人の発達において他者理解は自己理解に先立つ
３．自己とは――他者との対峙を通して発現する一個存在
６．講義一辺倒の授業における学習においてさえ他者は組み込まれている
７．学習プロセスに他者を組み込む――ペア・グループワークはなぜ求められるのか
９．リフレクション（振り返り）はメタ認知を働かせた言語活動
10．自己内対話と学習

第３章　エージェンシー

１．OECDの学習者のエージェンシー
３．バンデューラのエージェンシー論―四つの特徴
５．自己肯定感を高めるのではなく、自己効力感（エージェンシー）を高めよ
６．内発的動機づけ・自己決定理論――主体的な学習の第I～II層
７．記憶の情報処理から見た学習―自己関連づけ・自己生成

第４章　教育雑考

２．自分が生徒の時にはアクティブラーニングをしてこなかった。なぜ今の生徒にここまで求めるのか
３．社会に生きる個性を育てる――教授パラダイムと学習パラダイムに関連づけて
４．生徒はアクティブラーニングを熱心におこなうが、教師は成果としての手応えを感じない。そこで起こっていることは？
５．アクティブラーニングと評価